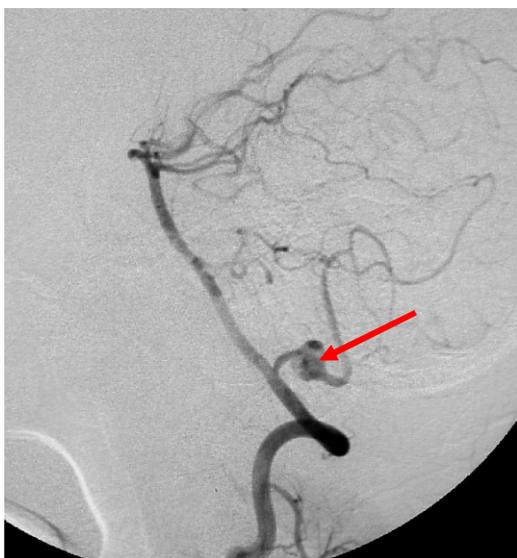


脳動脈瘤の治療は相手を良く知ることから。

脳動脈瘤の治療を考えるにあたって、脳動脈瘤の形態を前もって詳しく知ることによって治療上の留意点やベストの方法がおのずと見えてきます。以前は脳血管造影検査で正面、側面、斜め方向など脳動脈瘤を平面に投射する形で写真に撮り、その形態を判断してきました。

最近では放射線診断機器の進歩により三次元の立体構造をそのまま写真にあらわすことが出来るようになりました。この方法により治療対象の脳動脈瘤と温存すべき脳動脈との詳細な位置関係や治療上問題となる動脈瘤頸部（動脈からコブが膨隆する出口のことで、しっかり処理すべきところ）の形態について質の高い立体的イメージを得ることができます。当院では最新鋭の三次元脳血管造影装置（3D-DSA）が稼動し、それぞれの患者さんの脳動脈瘤についてクリップで処理したほうが良いかコイルで閉塞させるほうが良いか、その治療手段の選択に役立っています。

（例1）矢印で示すところが脳動脈瘤です。



従来の脳血管造影検査。側面像。

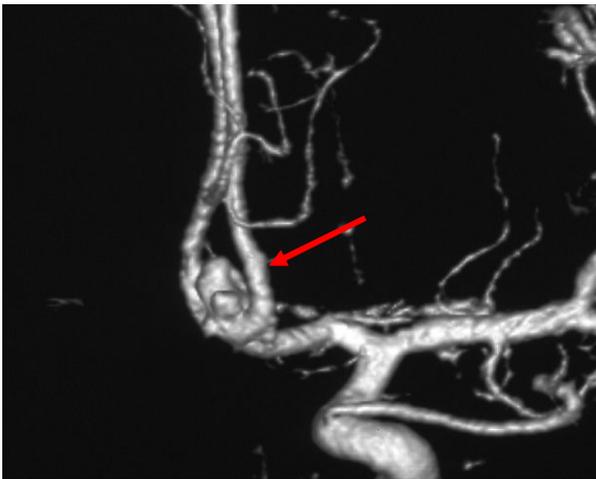


最新の3D DSA：動脈それ自体が限られた範囲だけ膨らんでいる様子がよくわかります。動脈を温存する形でクリップにより処理されました。

(例2)

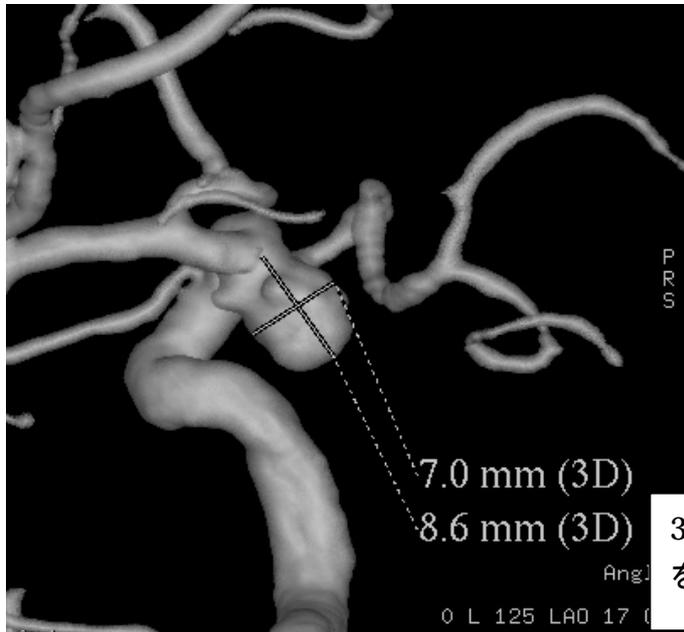


従来の方法では動脈の重なりのため
動脈瘤の存在がよくわかりません。



最新の3D-DSA：縦走する2本の動脈の間に
脳動脈瘤があり、根元に小隆起をともな
っていることがよくわかります。

(例3) 当院の最新鋭血管撮影装置は、動脈瘤の形状や大きさを1回の撮影で様々な角度から観察することが可能で、血管内治療には非常に有利な器械です。



3D-DSAで動脈瘤の形状大きさを検討します。

